

本当は予防できる認知症

～あなたはその秘訣(ひけつ)を知っていますか？～

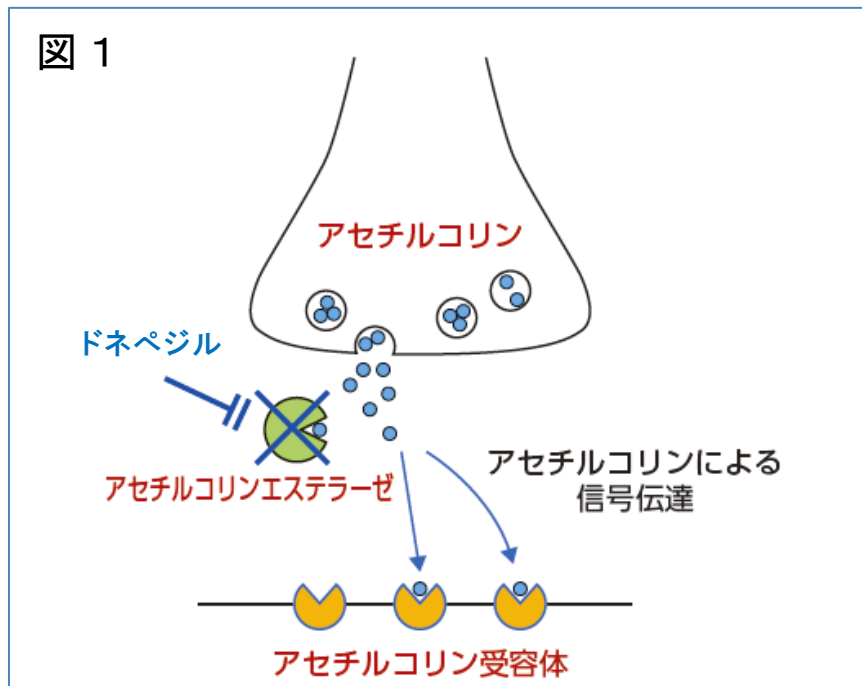
国立循環器病研究センター 脳神経内科 猪原匡史

第5回 認知症の薬物療法

これまで、認知症予防のための運動療法の例として「デュアルタスク」、食事療法の例として「かるしおレシピ(適塩)」を取り上げてきました。今回は、認知症予防の三位一体治療の残る一つの柱、薬物療法を取り上げます。

1 アルツハイマー病の対症療法

アルツハイマー病ではドネペジルやガランタミンなどのコリンエステラーゼ阻害薬という薬を使って、脳の中で減少したアセチルコリンを増やして認知機能を改善させたり(図1)、メマンチンという、神経細胞が過剰に興奮するのを抑える薬を使って、病状の進行を遅らせようとする治療が行われます。ガランタミンは血管性認知症に対しても有効であるという海外のデータもあります。これらは根本療法ではありませんが、対症治療として一時的に症状を緩和させる治療という位置付けになります。



国立循環器病研究センター発行「循環器病あれこれ(107)認知症とたたかう」より抜粋

2 アルツハイマー病の未来の治療法

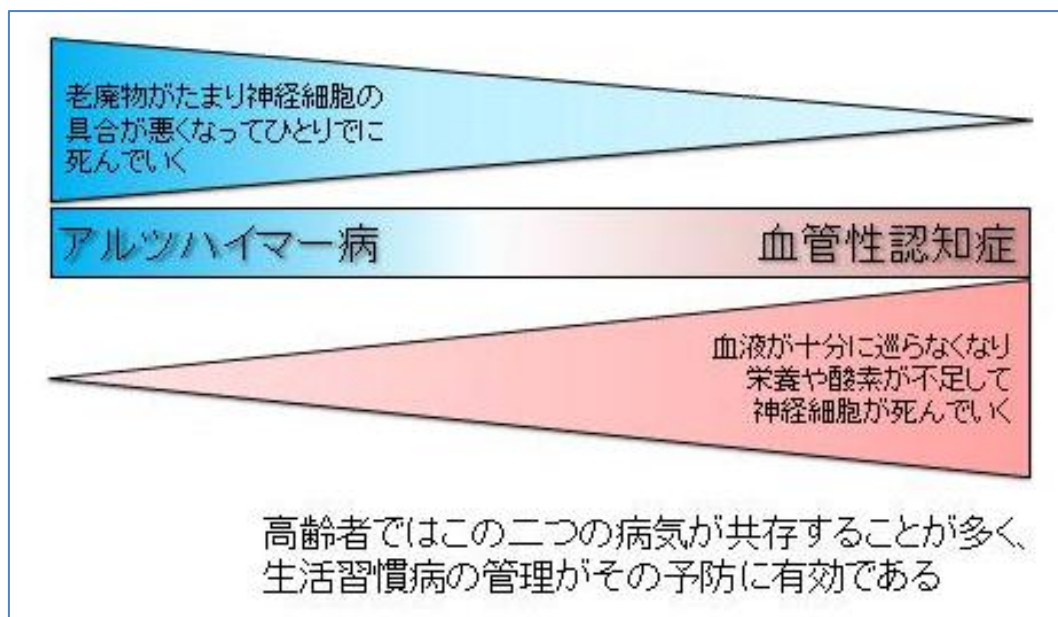
アルツハイマー病の根治療法として注目されているのが、アルツハイマー病の原因物質であるβアミロイドに対する抗体療法です。簡単にいうと、抗体というβアミロイドを攻撃するミサイルを体で作ったり体外から投与したりして、脳に蓄積したβアミロイドの塊を破壊して取り除こうとするものです。現在のところうまくいっていないため、少し方法を見直した上で臨床研究が続けて行われています。うまくいかなかった原因の一つが、βアミロイドの神経

細胞周辺での蓄積（老人斑と呼ばれるしみ）は減少したものの、かえって血管への蓄積が増えてしまった、というものでした。これは高齢者では多かれ少なかれ動脈硬化が起こっていることと関連していると考えられています。

また、他に現在開発中で期待されている治療法は、糖尿病の治療に使うインスリンを点鼻噴霧するというものです。インスリンは、神経細胞が糖を取り込み利用するのを手助けしているため、糖を唯一の栄養源とする脳では欠かせないホルモンです、したがって、インスリンが脳で不足すると、脳がうまく働かなくなり、アルツハイマー病が起こるという「脳のメタボ仮説」に、この治療法は基づいています。インスリンは糖尿病に広く使われていますので、有効性が証明されればアルツハイマー病の患者さんにとって光明となるでしょう。「糖尿病は血管病」といわれるほど、糖尿病は動脈硬化を引き起こす最たる疾患です。先の抗体療法も結局のところ、動脈硬化がその成否に関わっていました。このように、アルツハイマー病を代表とする神経変性疾患においても、血管を健全にする方策を講じなくてはならないことを示しているといえるでしょう。

3 認知症予防のための生活習慣病治療薬

これまで、アルツハイマー病と血管性認知症では、治療法が異なるようにいわれることが多かったのですが、動脈硬化がアルツハイマー病治療開発の成否を握る可能性があることが分かってきました。つまり、認知症の原因のほとんどを占めている2大疾患、アルツハイマー病と血管性認知症は、いずれも生活習慣病を厳重に管理することで進行を予防できることが分かってきたのです。高血圧には降圧薬、糖尿病には血糖降下薬、脂質異常症にはスタチンという薬剤など、生活習慣病管理は薬物療法の進歩で昔よりも簡単になりました。食事療法と運動療法に加えて、適切な薬物療法の導入が認知症予防に推奨されます。



認知症予防の秘訣 その5

- ✚ **アルツハイマー病も血管性認知症も生活習慣病の管理が第一！**
- ✚ **認知症予防には食事療法・運動療法・薬物療法の三位一体の治療を**

